

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷二十二第

行發日一月六年五十正大

論叢

資本利子税の缺點……………法學博士 神戸 正雄

海運同盟の排他的手段に對する北米合衆國の政策 教授 小島昌太郎

岡山藩の税制……………教授 黒正 巖

新經濟政策とロシア勞働立法……………教授 末川 博

チャアルス・ホールの政策論……………教授 堀 經夫

時論

英國の總同盟罷業……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

長野縣下に於ける地割の慣行……………經濟學博士 本庄榮治郎

雜錄

世事蘆髓觀……………法學博士 財部 靜治

獨逸に於ける宗教統計……………經濟學士 中川與之助

法令

營業收益税法・資本利子税法・相續税法中改正

附錄

本誌第二十二卷總目錄

法 令

營業收益稅法

法律第十一號 (大正十五年三月二十七日)

第一條 本法施行地ニ本店、支店其ノ他ノ營業場ヲ有スル營利

法人ニハ本法ニ依リ營業收益稅ヲ課ス

第二條 本法施行地ニ營業場ヲ有シ左ニ掲クル營業ヲ爲ス個人

ニハ本法ニ依リ營業收益稅ヲ課ス

一 物品販賣業 (動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノノ販賣ヲ含ム)

二 銀行業

三 無繼業

四 金錢貸付業

五 物品貸付業 (動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノノ貸付ヲ含ム)

六 製造業 (瓦斯電氣ノ供給、物品ノ加工修理ヲ含ム)

七 運送業 (運送取扱ヲ含ム)

八 倉庫業

九 請負業

法 令

十 印刷業

十一 出版業

十二 寫真業

十三 席貸業

十四 旅人宿業 (下宿ヲ含ミ木賃宿ヲ含マズ)

十五 料理店業

十六 周旋業

十七 代理業

十八 仲立業

十九 問屋業

第三條 營業收益稅ハ營業ノ純益ニ付之ヲ賦課ス

第四條 法人ノ純益ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シ

タル金額ニ依ル

法人カ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合

ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間

ヲ以テ一事業年度ト看做ス

第五條 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人

ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ純益ニ付營業收益稅ヲ納ム

ル義務アルモノトス

第六條 個人ノ純益ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控

除シタル金額ニ依ル但シ前年一月一日ヨリ引續キ爲シタルニ

非サル營業ニ付テハ其ノ年ノ豫算ニ依リ計算ス

相續シタル營業ニ付テハ相續人カ引續キ之ヲ爲シタルモノト

看做シテ其ノ純益ヲ計算ス

法令

第二十二卷 (第六號一六四) 一〇四四

資本利子税ノ課セラレヘキ資本利子ハ之ヲ純益ニ算入セス

第七條 左ニ掲クル營業ノ純益ニハ營業收益税ヲ課セス

一 政府ノ發行スル印紙切手類ノ賣捌

二 度量衡ノ製作、修覆又ハ販賣

三 自己ノ採掘シ又ハ採取シタル礦物ノ販賣

四 新聞紙法ニ依ル出版

五 本法施行地外ニ在ル營業場ニ於テ爲ス營業

六 法人ノ漁業又ハ演劇興業

七 個人ノ自己ノ收穫シタル農産物、林産物、畜産物若ハ水産物ノ販賣又ハ之ヲ原料トスル製造但シ特ニ營業場ヲ設ケ

テ爲ス販賣又ハ製造ヲ除ク

第八條 勅令ヲ以テ指定スル重要物産ノ製造業ヲ營ム者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ開業ノ年及其ノ翌年コリ三年間其ノ營業

コリ生スル純益ニ付營業收益税ヲ免除ス

第九條 個人ノ純益金額四百圓ニ滿テサルトキハ營業收益税ヲ

課セス

第十條 營業收益税ハ左ノ税率ニ依リ之ヲ賦課ス

法人 百分ノ三・六

個人 百分ノ二・八

法人カ各事業年度ニ於テ納付シタル地租額又ハ資本利子税額

ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該事業年度ノ營業收益税額ヨリ之

ヲ控除ス

個人カ其ノ營業用ノ土地ニ付納付シタル地租額ハ命令ノ定ム

ル所ニ依リ其ノ營業收益税額ヨリ之ヲ控除ス

前二項ノ場合ニ於テ控除スヘキ地租又ハ資本利子税ハ純益計算上之ヲ損金又ハ必要經費ニ算入セス

第十一條 納税義務アル法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ純益金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第十二條 納税義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月

十五日迄ニ純益金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第十三條 法人ノ純益金額ハ第十一條ノ申告ニ依リ、申告ナキ

トキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府

ニ於テ之ヲ決定シ個人ノ純益金額ハ所得税法ノ所得調査委員

會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後個人ノ純益金額ノ決定ニ付脱漏アルコ

トヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於

ケル所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ

決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後個人ノ營業ニ付納税義務アルコトヲ申

出テ又ハ純益金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項

ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定ス

第十四條 稅務署長ハ毎年個人ノ營業ニ付納税義務アリト認ム

ル者ノ純益金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付

スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十五條 所得税法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ純益金額

ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第十六條 十三條又ハ前條ノ規定ニ依リ純益金額ヲ決定シタ

ルキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十七條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル純益金額ニ對シテ異議アルトキハ通知シ受ケタル日ヨリ二十日以

内ニ不服ノ事出ラ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第十八條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審

査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 個人ノ營業ニ付納稅義務アル者純益金額二分ノ一以

上減損ノルトキハ政府ニ純益金額ノ更訂ノ請求ヲ爲スコトヲ

得但シ翌年一月三十一日ヲ過キタルトキハ此ノ限ニ在ラス

純益金額決定後營業繼續ニ因リ純益金額ノ減損シタル場合ハ前項ノ規定ヲ適用セズ

第二十條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ純益金額ヲ

査數シ二分ノ一以上ノ減損アルトキハ之ヲ更訂ス

第二十一條 納稅義務者第十八條ノ決定又ハ前條ノ更訂處分ニ

對シ不服アルトキハ訴訟又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第二十二條 法人ノ營業收益稅ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス

個人ノ營業收益稅ハ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第二十三條 第十九條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ更訂

處分ノ確定スルニ至ル迄税金ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第二十四條 個人ノ營業收益稅ハ納稅義務者ノ住所、住所ナ

キトキハ主タル營業場ノ所在地ヲ以テ納稅地トス但シ三種

ノ所得ニ付所得稅ヲ納ムル者ニ在リテハ所得稅ノ納稅地ヲ以

テ營業收益稅ノ納稅地トス

第二十五條 收稅官吏ハ營業ニ關スル帳簿物件ヲ検査シ又ハ營

業者ニ質問スルコトヲ得

第二十六條 政府ハ同業組合ノ他ノ營業者ノ團體ニ對シ營業

收益稅ニ關スル事項ヲ詢問スルコトヲ得

前項ノ詢問ヲ受ケタル團體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ調書ヲ提

出スヘシ

第二十七條 所得稅法第七十三條ノ二ノ規定ハ純益金額ノ計算

ニ付之ヲ準用ス

第二十八條 第二十五條ノ規定ニ依ル帳簿物件ノ検査ヲ妨ケ又

ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル帳簿ヲ提示シタル者ハ百圓以下ノ罰

金ニ處ス

第二十九條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ營業收益稅ヲ遁脱シ

タル者ハ其ノ遁脱シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料

ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ

罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ個人ノ營業ニ付營業收益稅ヲ遁脱シタル者

ノ純益金額ハ第十三條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ

決定シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス

第三十條 營業收益稅ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事

シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由

ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條

第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

附則

本法ハ大正十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

法人ハ大正十六年一月一日以後ニ終了スル事業年度ノ期間カ大正十五年ニ跨ルモノニ付テハ當該事業年度ノ純益金額ヨリ日割計算ノ方法ニ依リテ算出シタル大正十五年ニ屬スル期間ノ純益ヲ控除ス

備考

營業稅法ハ大正十五年三月法律第十號ヲ以テ廢止セララル

資本金子稅法

法律第十二號 (大正十五年三月二十七日)

第一條 本法施行地ニ於テ資本金子ノ支拂ヲ受クル者ニハ本法ニ依リ資本金子稅ヲ課ス

第二條 資本金子稅ハ本法施行地ニ於テ支拂ヲ受クル左ノ資本金子ニ付之ヲ賦課ス

甲種 公債、社債、産業債券若ハ銀行預金ノ利子又ハ貸付信託ノ利益

乙種 第三種ノ所得ニ付納稅義務ヲ有スル者ノ第三種ノ所得

第二十二卷 (第六號 一六六) 一〇四六

中營業ニ非サル貸金又ハ預金ノ利子

本法ニ於テ貸付信託ト稱スルハ所得稅法第三條ノ三ニ規定スル貸付信託ヲ謂フ

第三條 甲種ノ資本金子ハ其ノ支拂ヲ受クヘキ金額ニ依ル

第四條 乙種ノ資本金子ハ前年中ノ收入金額ニ依ル
被相續人ノ收入金額ハ之ヲ相續人ノ收入金額ト看做ス

第五條 甲種ノ資本金子ニシテ二ニ掲グルモノニハ資本金子稅ヲ課セス
一 所得稅法其ノ他ノ法律ニ依リ第二種所得稅ヲ課セラレサル者ノ支拂ヲ受クル利子

二 貯蓄債券又ハ復與貯蓄債券ノ利子

第六條 資本金子稅ノ稅率ハ資本金子金額百分ノ二トス
信託會社カ其ノ引受ケタル貸付信託ノ信託財產ニ付納付シタル資本金子稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該貸付信託ノ利益ニ對スル資本金子稅額ヨリ之ヲ控除ス

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ資本金子稅ハ其ノ貸付信託ノ利益ニ之ヲ加算ス

第七條 乙種ノ資本金子ニ付納稅義務アル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ其ノ資本金子金額ヲ政府ニ申告ス

第八條 乙種ノ資本金子金額ハ所得稅法ノ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後乙種ノ資本金子ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於

ケル所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ資本利子金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ資本利子金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ其ノ資本利子金額ヲ決定ス

第九條 稅務署長ハ毎年乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アリト認ムルノ資本利子金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十條 所得稅法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ資本利子金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第十一條 第八條又ハ前條ノ規定ニ依リ乙種ノ資本利子金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十二條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル資本利子金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事出ラ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セス

第十三條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第五十二條第六十一條及第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十四條 納稅義務者前條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴訟又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十五條 甲種ノ資本利子ニ付テハ其ノ金額支拂ノ際支拂者其ノ資本利子稅ヲ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムヘシ

乙種ノ資本利子ニ付テハ資本利子稅ノ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限
第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第十六條 前條第一項ノ規定ニ依リ徵收スヘキ資本利子稅ヲ徵收セサルトキ又ハ其ノ徵收シタル税金ヲ納付セサルトキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

第十七條 乙種ノ資本利子ニ付テハ第三種ノ所得ニ對スル所得稅ノ納稅地ヲ以テ資本利子稅ノ納稅地トス

第十八條 收稅官吏ハ調査上必要アルトキハ資本利子ノ支拂ヲ受ケ又ハ其ノ支拂ヲ爲スト認ムル者ニ質問スルコトヲ得

第十九條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ資本利子稅ヲ遁脫シタル者ハ其ノ遁脫シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ料料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ乙種ノ資本利子ニ付資本利子稅ヲ遁脫シタル者ノ資本利子金額ハ第八條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス

第二十條 資本利子ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但

法 令

第二十二卷 (第六號 一六八) 一〇四八

書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條
 第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ前條ノ罪
 ヲ犯シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ資本利子税ノ附加
 税ヲ課スルコトヲ得ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

乙種ノ資本利子ニ付テハ大正十五年分資本利子税ヨリ本法ヲ適
 用ス但シ大正十五年ニ限リ第七條中三月十五日トアルハ四月三
 十日、第十五條中其ノ年八月一日ヨリ三十一日限トアルハ其ノ
 年九月一日ヨリ三十日限、第十條ノ規定ニ依ル期日五月三十一
 日トアルハ八月三十日トス

相續税法中改正

法律第十三號 (大正十五年三月二十七日)

第三條ノニヲ削ル

第四條第二項中「船舶」及第一號ヲ削リ第二號ヲ第一號トシ以
 下順次繰上ク

第六條中「二千圓」ヲ「五千圓」ニ、「五百圓」ヲ「千圓」ニ改メ但書
 ヲ削ル

第八條第一項ヲ左ノ如ク改ム

相續税ハ課税價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相續
 人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ課ス

課 税 價 格		家 督 相 續 税	
		稅	率
五千圓以下ノ金額	相續人カ被相續人ノ家族 タル直系卑屬ナルトキ	相續人カ被相續人ノ指定 シタル者、民法第九百八 十二條ニ依リ選定セラレ タル者、被相續人ノ家族 タル直系尊屬又ハ入夫ナ ルトキ	相續人カ民法第九百八十 五條ニ依リ選定セラレタ ル者ナルトキ
五千圓ヲ超エル金額	千分ノ五	千分ノ六	千分ノ八
一萬圓ヲ超エル金額	千分ノ六	千分ノ七	千分ノ十
二萬圓ヲ超エル金額	千分ノ七	千分ノ八	千分ノ十五
三萬圓ヲ超エル金額	千分ノ八	千分ノ十	千分ノ二十
	千分ノ十	千分ノ十五	千分ノ二十五

課 稅 價 格	遺 産 相 續 稅		率
	相續人カ直系卑屬ナルトキ	相續人カ配偶者又ハ直系尊屬ナルトキ	
四萬圓ヲ超スル金額	千分ノ十五	千分ノ二十	千分ノ三十
五萬圓ヲ超スル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ四十
七萬圓ヲ超スル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ五十
十萬圓ヲ超スル金額	千分ノ三十	千分ノ四十	千分ノ六十
十五萬圓ヲ超スル金額	千分ノ四十	千分ノ五十	千分ノ七十
二十萬圓ヲ超スル金額	千分ノ五十	千分ノ六十	千分ノ八十
三十萬圓ヲ超スル金額	千分ノ六十	千分ノ七十	千分ノ九十
四十萬圓ヲ超スル金額	千分ノ七十	千分ノ八十	千分ノ百
五十萬圓ヲ超スル金額	千分ノ八十	千分ノ九十	千分ノ百十
七十萬圓ヲ超スル金額	千分ノ九十	千分ノ百	千分ノ百二十
百萬圓ヲ超スル金額	千分ノ百	千分ノ百十	千分ノ百三十
二百萬圓ヲ超スル金額	千分ノ百十	千分ノ百二十	千分ノ百四十
三百萬圓ヲ超スル金額	千分ノ百二十	千分ノ百三十	千分ノ百五十
五百萬圓ヲ超スル金額	千分ノ百三十	千分ノ百四十	千分ノ百六十
千圓以下ノ金額	千分ノ十	千分ノ十二	千分ノ十七
千圓ヲ超スル金額	千分ノ十二	千分ノ十四	千分ノ二十
五千圓ヲ超スル金額	千分ノ十四	千分ノ十七	千分ノ二十五
一萬圓ヲ超スル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十五
二萬圓ヲ超スル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ四十五
三萬圓ヲ超スル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ五十五
四萬圓ヲ超スル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ六十五
五萬圓ヲ超スル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十五	千分ノ七十五
七萬圓ヲ超スル金額	千分ノ四十五	千分ノ五十五	千分ノ八十五

法 令

第二十二卷 (第六號一六九) 一〇四九

法令

十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十五	千分ノ七十五	千分ノ九十五
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七十五	千分ノ八十五	千分ノ百五
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八十五	千分ノ九十五	千分ノ百十五
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ九十五	千分ノ百五	千分ノ百二十五
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五	千分ノ百十五	千分ノ百三十五
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百十五	千分ノ百二十五	千分ノ百四十五
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百二十五	千分ノ百三十五	千分ノ百四十五
百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百三十五	千分ノ百四十五	千分ノ百六十五
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五十五	千分ノ百六十	千分ノ百七十五
三百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百六十五	千分ノ百七十五	千分ノ百八十五
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百八十五	千分ノ百九十五	千分ノ二百十

第二十二卷 (第六號 一七〇) 一〇五〇

第十七條中「五年」ヲ「七年」ニ改ム

第二十三條中「五百圓」ヲ「千圓」ニ、「被相續人カ推定家督相續人又ハ推定遺産相續人」ヲ「親族」ニ改ム

第二十二條ノ二ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ場合ニ於テ受益者不特定ナルトキ又ハ未ダ存在セザルトキハ委託者ノ直系卑屬ヲ受益者ト爲シタルモノト看做シ其ノ受益者ヲ相續財産管理人ト看做ス

附則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

〔參照〕

明治三十八年(二月一日公布)法律第十號相續稅法抄錄

第三條ノ二 家督相續ノ場合ニ於テハ前條ノ規定ニ依リ算出

シタル課稅價格三千圓以下ナルトキハ一千圓ヲ、五千圓以下ナルトキハ五百圓ヲ控除ス

第四條第二項

船舶、地上權、永小作權及定期金ニ付テハ政府ハ左ノ方法ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス

一 船舶ニ付テハ其ノ製造費中ヨリ製造後ノ年數ニ應シ一年ニ付其ノ二十五分ノ一宛テ控除シタルモノヲ以テ其ノ價額トス但シ製造後二十年ヲ經過シタルモノハ製造費ノ五分ノ一ヲ以テ其ノ價額トス

一年ニ滿タサル端數ハ之ヲ一年トシテ計算ス

第六條 課稅價格カ家督相續ニ在リテハ二千圓、遺産相續ニ在リテハ五百圓ニ滿タサルトキハ相續稅ヲ課セス但シ第三條ノ二ノ規定ニ依ル金額ノ控除シタル爲ニ二千圓ニ滿タサルニ至リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第八條第一項

相續稅ハ課稅價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相續人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ課ス

家 督 相 續

率

課 稅 價 格

相續人カ被相續人ノ家族
タル直系卑屬ナルトキ

相續人カ被相續人ノ指定
シタル者、民法第九百八
十二條ニ依リ選定セラレ
タル者、被相續人ノ家族
タル直系卑屬又ハ入夫ナ
ルトキ

相續人カ民法第九百八十
五條ニ依リ選定セラレタ
ル者ナルトキ

五千圓以下ノ金額
五千圓ヲ超ユル金額
一萬圓ヲ超ユル金額
二萬圓ヲ超ユル金額
三萬圓ヲ超ユル金額
四萬圓ヲ超ユル金額
五萬圓ヲ超ユル金額
七萬圓ヲ超ユル金額
十萬圓ヲ超ユル金額
十五萬圓ヲ超ユル金額
二十萬圓ヲ超ユル金額
ハ其ノ十萬圓毎ニ(百
萬圓ニ至テ止ム)

千分ノ五
千分ノ六
千分ノ七
千分ノ八
千分ノ十
千分ノ十二
千分ノ十四
千分ノ十七
千分ノ十七
千分ノ二十
千分ノ二十五
千分ノ二十五

千分ノ六
千分ノ七
千分ノ八
千分ノ十
千分ノ十二
千分ノ十四
千分ノ十七
千分ノ十七
千分ノ二十
千分ノ二十五
千分ノ三十
千分ノ三十

千分ノ八
千分ノ十
千分ノ十二
千分ノ十四
千分ノ十七
千分ノ十七
千分ノ二十
千分ノ二十五
千分ノ三十
千分ノ三十五
千分ノ四十
千分ノ五十

遺 産 相 續

率

課 稅 價 格

相續人カ直系卑屬ナルト
キ

相續人カ配偶者又ハ直系
卑屬ナルトキ

相續人カ其ノ他ノ者ナル
トキ

千圓以下ノ金額

千分ノ十

千分ノ十二

千分ノ十七

法 令

第三十二卷(第六號)二七一、二〇五一

千圓ヲ超ユル金額
 五千圓ヲ超ユル金額
 一萬圓ヲ超ユル金額
 二萬圓ヲ超ユル金額
 三萬圓ヲ超ユル金額
 四萬圓ヲ超ユル金額
 五萬圓ヲ超ユル金額
 七萬圓ヲ超ユル金額
 十萬圓ヲ超ユル金額
 十五萬圓ヲ超ユル金額
 二十萬圓ヲ超ユル金額
 八其ノ十萬圓毎ニ(百
 萬圓ニ至テ止ム)

千分ノ十二
 千分ノ十四
 千分ノ十七
 千分ノ二十
 千分ノ二十五
 千分ノ三十
 千分ノ三十五
 千分ノ四十
 千分ノ四十五
 千分ノ五十
 千分ノ五ヲ加フ

千分ノ十四
 千分ノ十七
 千分ノ二十
 千分ノ二十五
 千分ノ三十
 千分ノ三十五
 千分ノ四十
 千分ノ四十五
 千分ノ五十
 千分ノ五十五
 千分ノ五ヲ加フ

千分ノ二十
 千分ノ二十五
 千分ノ三十
 千分ノ三十五
 千分ノ四十
 千分ノ四十五
 千分ノ五十
 千分ノ五十五
 千分ノ六十
 千分ノ六十五
 千分ノ五ヲ加フ

第十七條第一項

相續稅ハ一時ニ之ヲ納付スヘシ但シ稅金額百圓以上ナルト
 キハ相續稅ニ相當スル擔保ヲ提供シ五年以内ノ年賦延納シ
 求ムルコトヲ得

第二十三條 左ニ掲ケル場合ニ於テ本法施行地ニ在ル不動産
 及船舶以外ノ財産ニ付爲シタル贈與ノ價額カ五百圓以上ナ
 ルトキハ遺産相續開始シタルモノト看做シ其ノ財産ノ價額
 ノ課稅價格トシテ本法ニ依リ相續稅ヲ課ス

一 被相續人カ推定家督相續人又ハ推定遺産相續人ニ贈與
 シ爲シタルトキ

第二十三條ノ二 信託ニ付委託者カ他人ニ信託ノ利益ヲ受ク
 ヘキ權利ヲ有セシメタルトキハ其ノ時ニ於テ信託ノ利益ヲ
 受クヘキ權利ヲ贈與又ハ遺贈シタルモノト看做シ第三條第

二十條及前條ノ規定ヲ適用ス但シ不動産又ハ船舶ノ歸屬ス
 ヘキ權利ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用セス